

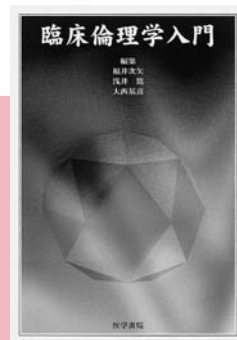
日々の倫理的課題に 「見解」を出していくために

[評者] 小島恭子 北里大学病院看護部長

臨床倫理学入門

福井次矢, 浅井 篤, 大西基喜 編

A5 判, 320 ページ
定価 2940 円 (本体 2800 円 + 税 5%)
医学書院 TEL.03-3817-5659



「倫理」を意識しないで病院業務を終える日はない」。医師である本書の編者の序文にまず「看護職者もしかり」と、同感を覚える。患者の最も身近にいる看護職者も、「倫理」に直面し、倫理を意識しつつ、看護業務を遂行している。

■倫理的判断とその根拠をたどり考察を深める

編者は、臨床倫理学を実際の臨床現場の問題を扱う実践的な応用倫理学として位置づけ、医療におけるよりよい倫理的意思決定を模索し、よりよい結果を出すための分野であり、実際に役立つものでなければならない、と述べている。

本書の基本的なスタイルは、冒頭にまず倫理的な判断を迫られるケースを取り上げ、どのような選択が最も好ましいかを検討し、その項目の著者らが倫理的に適切と考える決断や判断をその根拠とともに解説している。また、主要な論文や最新のデータ、他国の歴史的な症例や裁判の論点、判例等も紹介しており、本書で取り上げられたような症例を検討するときの参考になる。

臨床現場では、「このような場合は、どのように考えれば良いのだろうか?」としばしば疑問に突き当たる。このような時、本書を繙けば、提示されている事例の見解が参考になる。示された見解の根拠をたどり、自らの事例と照らし合わせ、倫理的な考察を深めることができる。

■倫理実践を支える姿勢

本書では、医師患者関係、インフォームドコン

セント、守秘義務、臓器移植、遺伝子診断、医療資源の配分、終末期医療といった、日常よく遭遇するケースが提示されており、従来から解答を出すのが困難と言われている課題についても、著者らの立場から見解が明確に述べられているのが最大の特徴である。「見解を明確に述べる」ことは、生命倫理学、医の倫理、および臨床の倫理実践等の諸側面において造詣が深くなければ、なかなかたどりつけない苦しさがあり、勇気のいることだと体験している。その点において、本書の著者らの力量に敬服する次第である。

■見解を出しにくい課題の検討の進め方も参考に

最終章では、エシックス・ケース・カンファレンスの実際が掲載されている。筆者の病院でも、看護倫理を検討するためのシステム化を実施し、多くの倫理事例の検討を行なってきたが、一回の検討では、結局見解が導き出されないまま終わる事例もある。あるいは引き続き、何らかの見解を再度探し求める課題が残る検討事例も少なくない。

そういった倫理事例の検討会の進め方においても、本書に掲載されたカンファレンスを読むと、それなりの見解を導き出ししながら、進めていく様子がよくわかる。このことは読者が実際に検討を進める時の参考になるだろう。

臨床におけるよりよい倫理実践を支えてくれる力強い一冊として、本書を推薦する次第である。